

【講演会等報告】

特別企画「音楽ってなあに—楽器の文化あれこれ鼎談—」報告

甲 地 利 恵

当学会会員である音楽学の研究者 3 名が一堂に会し、それぞれが研究する楽器やそれを生み出した文化について、また研究の課題や展望などについて気軽に話し合う、北海道民族学会にとって初の試み。実演等も交えた鼎談を通じて、「楽器」を軸にそれぞれの音楽文化研究について発信する機会とした。

この特別企画は、会場でもある帯広百年記念館との共催により、同館の公開講演会として開催された。当日は学会員および一般市民が参加した。

日 時： 2014 年 11 月 16 日（日）10:00~12:00

会 場： 帯広百年記念館 2 号室

鼎 談： 柘谷隆男（北海道札幌拓北高等学校教諭）

荏原小百合（北海道大学大学院文学研究科専門研究員／札幌大谷大学芸術学部非常勤講師）

荒山千恵（いしかり砂丘の風資料館学芸員）

司 会： 甲地利恵（北海道立アイヌ民族文化研究センター研究課長）

主 催： 北海道民族学会

共 催： 帯広百年記念館

## 1 開会

（♪鼎談の 3 名が、それぞれ楽器を演奏しながら登場）（会場拍手）

（司会）皆さん、おはようございます。進行を務めます甲地です。よろしく願いいたします。

鼎談の 3 人をご紹介します。まず、向かって左端、**柘谷隆男**さんです。北海道札幌拓北高等学校の音楽科の先生をしていらっしゃいます。ふだんは音楽科の先生らしく（笑）、ピアノを弾き歌を歌っていらっしゃるんですが、実は知る人ぞ知る「鹿笛」研究の第一人者です。「鹿笛」というのは、シカをおびき寄せるための、シカの鳴き声を模した笛ですが、その鹿笛のなんでも物知り博士です。現在は、東北地方の民俗芸能などにも研究の対象を広げていらっしゃいますが、それらも含め今日は「笛」をキーワードに、音楽の起源といったところまで幅広くお話をいただく予定です。

次に、その隣に座っていらっしゃる**荏原小百合**さんです。荏原さんは現在北海道大学大学院の研究員をなさるかたわら、札幌大谷大学芸術学部で「民族音楽」という授業をはじめ、楽しい授業をなさっています。ご自身はフルート奏者でもあり、同時に、アイヌの口琴や口琴に関わる活動をご研究、またロシアのサハ共和国のサハ（民族）の口琴「ホムス」を中心とするサハの音楽文化を幅広く調べていらっしゃいます。今日はそういった口琴の文化について、幅広くお話しいただけるとと思います。

最後に、**荒山千恵**さん、いしかり砂丘の風資料館の学芸員です。荒山さんは「音楽考古学」という、考古学の観点から音の文化というものを研究なさっている方です。音楽考古

学というのは、音楽学以上に、研究者の少ない分野です。その意味でも非常に貴重なご研究をなさっています。今日は、弥生・古墳時代の出土品をもとに復元なさった「琴（こと）」もお持ちいただいていますので、古代の音文化、悠久の歴史を感じさせる琴のお話を聞かせていただけたと思います。



開会后、鼎談者の紹介

## 2 それぞれの研究や興味関心

—鹿笛、笛、口琴、サハのホムス、音の考古学、古代の楽器、琴—

（**枅谷**）皆さんおはようございます。このような素晴らしい会にお招きいただきまして、本当にありがとうございます。先ほどの紹介の中に、大事なことを1つ忘れていました。何かというと、そこにヘルメットがあります。私は8月で60歳になりましたが、車の免許を持っていません。（乗るのは）バイクです。これが一番の私の特徴ではないかと（笑）思っています。このバイクで、日本でしか、フィールドワークとしてはしていません。日本以外の世界の部分については文献渉猟というかたちで研究をやっています。

まずは25年前のことからお話ししたいと思います。北海道札幌拓北高等学校に勤務して今年で10年になりますが、その前に15年間勤務した北海道札幌篠路高等学校で、文集、同人誌が発行されました。25年前の当時、転勤したばかりでしたが「こんなに素晴らしいものがあるのなら私も参加したい」といって、書くことになりました。

私はバイク乗りで、それもただ走るのではなく、人が通れないような、登れないような、渡れないようなところをバイクの力を借りて行く。雌阿寒岳の頂上にもバイクで上ったことがあります。そういうところで出会う動植物、とくにシカに興味がありましたので、そのシカの文化を調べて「鹿のおはなし」というタイトルで同人誌の2号から書くことにしました。

北海道でシカに関することが何かないかなと調べたら、まずはシカにまつわるアイヌ語地名がありました。シカのことをアイヌ語で「ユク yuk」といいます。たとえば札幌には「ユク・ニクリ」、「鹿・林」という地名があります。シカがまるで林のようにたくさんい

たという場所だそうですね。その場所には「鹿林」と書いて「かりん」と読むおいしい蕎麦屋さんも今、藻岩にあります（笑）。アイヌ語地名を和訳した素敵なお店です。

そういうことを調べていて、萱野茂さんの『アイヌの民具』（1978年、すずさわ書店）という本に出会いました。私は音楽家ですから「何か楽器がないのかな」と思って見ていたら...ムックリのように有名なものはもちろん出てくる他に、そこに「鹿笛」がありました。その鹿笛というのが...先ほど（入場時に）鹿笛を吹きながら出て来ましたが、これはちょっと鹿笛の中でも特殊なものです。

ふつう笛は細長いものです。（試奏♪）吹けば鳴ります。...（持参の鹿笛各種の中から取り上げて）これ、ちょっと（膜が）破れていますが、木でできています。なんか、塵取りみたいな形ですよ。萱野さんの本では凸型、吹き口の下側が真四角のような鹿笛が写真で載っていました。どう見たってこれ、笛に見えないですよ。【写真1】

日本で一番古い鹿笛は、縄文後期、今から4200年前の、長崎県の佐賀（さか）貝塚で、シカの角製のものが出ています。実は私、それを復元しましたが今はありません（高速道路で落として粉々になって）。

（別の鹿笛を取り上げ）これはアイヌの鹿笛です。破れていますが、シカの膀胱が張ってあります。上の、飛び出ているところから息を吹くと（♪試奏）、こういう高い音が出ます。今、私が調節したのは、口の中での、吹き口の嚙み方です。奥の方に入れると低くなります（♪試奏）。先の方になれば高くなります（♪試奏）。口に入れるリードの長さで変わり、アイヌ民族の鹿笛は、この上の皮を、横に引っ張ったり緩めたりすると音程が変わります。

シカの鳴き声はだいたい4オクターブあります。

（♪模倣）、上がってすぐ下がるんですね。その声を再現して、おびき寄せて捕るといふ笛があることに気が付いて、それから鹿笛の研究を始めるようになりました。

アイヌ民族のものだけかなと思ったら、こちらに考古学の専門家がいまいますが、縄文、弥生、古墳、平安と、最近相次いで発見されています。遺物の収蔵先の人は「鹿笛」を知らないから、何年間もただ収蔵庫にしまわれて「用途不明品」になっていました。それを次々と私が「鹿笛だよ」って指摘して、現在につながっています。少なくとも縄文時代からあるんですね。すごいですね、こういうもので（シカを）おびき寄せる。

皆さんが考える「音楽」とこの「♪ピユ～」とは、全然つながらないですよ。つながらないんですけれども、...一つ、面白い鹿笛を吹きます。【写真2】

（♪試奏）。これ、音階になっています。ドソドミソ...もっと高くなるとシのb、ドレミファソ...って上がって、下がってくるんですけど。「♪ピユ～」でなく



写真1 アイヌの鹿笛  
エリマキ製。上から吹くと表面の鹿の膀胱が鳴る。



写真2 エルク鹿笛  
アメリカ製。息の強さで倍音が出る。

て「♪タララララ...」と音階になっていましたよね。実は、エルクというアメリカにいるオオジカは、よく聴くと、そういう風に鳴いています。

今日は、わざと穴をふさいだ笛を持ってきましたが、これ、音が変わります。(♪試奏、「正露丸」CMでも知られている、旧日本陸軍の「食事」信号ラップの旋律) 正露丸の宣伝ではないです(笑)。息を吹くと、穴を指で開閉しなくても音程が変わるわけです。音階が自然に出てしまうものというものです。

——そういうところから、音楽の起源っていったい何なんだろうな、と深く考えるようになりました。

**(荏原)** 私は映像を交えてお話しさせていただきます。よろしくお願いたします。

お話しさせていただきたいことは、まず、この口琴＝ジューズハープ (Jew's harp) とは何なのか、ということ。次に、私が口琴と関わるようになった経緯——「あそう会」という、北海道東部標茶町の塘路というところの、非常に熱心な口琴の活動をしているグループに参加してシベリアとの縁につながっていった経緯——についてです。それから、サハがどこにあるかについてと、この「ホムス」。小さくって栓抜きぐらいの大きさなんです。形状も栓抜きっぽいですけど、そのホムスの演奏のテクニックとか、ホムスを作る鍛冶師のことを、お話ししたいと思います。

まず、アイヌ民族のムックリですが、ムックリは非常によく知られています。竹でできていて、糸をこういうふうに引いて鳴らす楽器です (♪試奏)。

スクリーンに映っている楽器はホムスといいます【写真 3】。栓抜きぐらいの大きさで、金属でできていて、構造はムックリと似ています。ただ、ムックリと違うのは、真ん中に走っている弁の部分を手で弾いて鳴らす楽器という点ですね。ホムスをちょっと弾いてみます (♪試奏)。(会場拍手)

私がどうしてホムスと出会ったかという——。標茶町塘路の磯嶋恵美子さんというかたが、1991年、まだソビエト連邦の頃ですが、サハ共和国 (当時ヤクート・サハ共和国) で開催された第2回国際口琴大会に参加しました。そこで同じ構造の楽器を持つ人たちと交流するようになったことがきっかけで「あそう会」というムックリの会を立ち上げられました。その「あそう会」で磯嶋さんにいろいろ話を聞き、活動に参加するようになったのが、私の関わりの最初です。

もちろん、サハとアイヌ民族にだけ口琴があるわけではありません。カザフスタンとか中央アジア、それからヨーロッパ。オーストリアのモルンなど鉄が採掘されるところ、シベリアのサハも鉄が採掘されます。そういうところには鉄の口琴があります。

一方、竹は北限があるので、竹が自生しているところは竹で作りますが、アジアでももう少し北にいくとこういう金属で作る口琴が多くなります。



写真 3 ホムス  
レヴォーリィ・チェムチョーエフ製作  
(サハ共和国・ヴィリュイスク市)

さて、シベリアのサハ共和国は、世界一、金属製の口琴が盛んな地域と言われています。そのサハ共和国、冬はマイナス 60℃ぐらいまでなる、ロシア連邦の中にあり、約 95 万人の人が住んでいる共和国です。日本の 8 倍くらいの面積があって、ダイヤモンドや、ホムスの材料にもなる鉄も採掘される、鉱物資源の豊富な地域です。

第 7 回国際口琴大会ではこんなふうに【写真 4、写真 5】、1344 人で口琴を一斉に演奏し、ギネスに登録されました。この 1344 人のなかにはアイヌ民族のムックリの演奏者たちも参加しています。この 1344 人に入れなかった人も含め、野外の夏至祭では約 3000 人で演奏しました。このように、非常に熱心な口琴ホムスへの取り組みがあります。

2011 年の世界民族口琴博物館（サハ）のパンフレットによれば、サハの少なくとも 7000 人ぐらいの人が、非常に熱心にホムスに取り組んでいます。

口琴のかたち、サハのホムスでも杵があって、その中に「弁」があります。サハ語で「舌」と呼んでいますが、この舌が自在に動いて、人間の舌の代わりに、いろいろ、歌ったり話したりできると考えられています。この、弁の先端の部分、サハ語で「チューチャッハ」、「小鳥」といいますが、これを弾いて歌う、さえずる、といった考え方を持っています。

ちょっとだけ、演奏の技法を紹介します。ムックリと非常に共通するものがあります。息を（♪試奏）吐いたり、（♪試奏）吸ったり。（♪試奏）組み合わせてみたり。手も、普通はこんな風に（♪試奏）、手前から後ろに弾きます。でも逆の手もあって、（♪試奏）、これを組み合わせると（♪試奏）。

それから、口腔内で舌で弁を弾きます、手を使わずにこんな風に（♪試奏）、演奏します。また、弁を指でしっかり押さえてこんな風に（♪試奏）、馬が駆けるリズムを表したりします。あるいはこんな風に、（♪試奏）弁の間に息を通して、ツンドラを吹き抜ける風を表します。最後に「トーキングホムス」は、弾きながら、声を出さずに話します。例えば「オーフオ オーフオ オーフオカイ」と夏至祭の輪踊りの歌をこんな風に、（♪試奏）。

こんな風に、その場で目で見えたもの、マイナス 60℃を超えて夏を迎えたというようなことを、ホムスで、歌だけではなくこの楽器を通じて表現します。そしてそれを国際口琴大会では 1344 人で、いっしょに、演奏し歌いあげたわけです。

ほかにも口琴の倍音についてなど、いろいろお話ししたいことがあります、ひとまず終わります。（会場拍手）

（司会）荒山さん、どうぞ。

（荒山）はい。スライドを映しながらお話ししたいと思います。



写真 4  
ギネスに挑戦：1344 名の口琴演奏



写真 5  
ウセエフ夏至祭でホムス演奏（約 3000 名）



写真6 『音の考古学』の表紙

私は、専門が考古学です。考古学という立場から、昔の音と人とのかかわりについて明らかにすることに挑戦する研究に取り組んでいます。学生の頃から「音の考古学」というテーマで研究を続けていまして、最近、この本<sup>1</sup>にまとめています【写真6】。表紙は、今まで私が取り組んできた代表する3種類の資料をデザインにしています。そこから紹介させていただきます。

1つ目は、卵のような形をした中空の土製品です【写真6：左】。時期は、弥生時代前期～中期初頭、紀元前2～3世紀頃です。これが、「土笛ではないか」として議論されてきたのですが、もしかしたら笛ではない可能性も考えなければならないことをこの本の中で述べています。実は、考古学では、出土したものが楽器かどうかを判断するところからとても難しいのです。

2つ目は、ベルです【写真6：中央】。これは小銅鐸（小型青銅製ベル）といわれるものでして、高さ10cm前後の小さなベルが、弥生時代中期～古墳時代前期頃に50点ぐらい見つかっています。

3つ目は、今日とくにスポットを当てて紹介したいと思っている絃楽器の「琴（こと）」です【写真6：右】。みなさんが知っている「お琴」とちょっと形が違うな、と思われるかもしれませんが。実は、この琴、弥生時代中期頃、だいたい2000年ぐらい前になると見られるものです。こちらについては、たとえば古墳時代の弾琴埴輪にも、同じような特徴をもつ琴を見ることができます。それから、現在でも神社の特別な儀式に使われている、「和琴（わごん）」と呼ばれている6絃の琴があります。和琴は、正倉院宝物の中にもあります。実は、この和琴に似た形の部分が、弥生・古墳時代の琴にも見られます。おそらく、和琴の原型となるものが、今から2000年ぐらい前からあったのではないかということが、考古学から分かるのです。そのようなお話をさせていただきます。（会場拍手）

（司会）荒山さん、ありがとうございます。今、荒山さんが、ふだん私たちが「おこと」と呼んでいるもの（＝箏）とは違う、非常に古い琴の話をしてくださいました。日本の伝統楽器というと、たいてい「おこと」「しゃみせん」という答えがしばしば返ってきますが、三味線は江戸時代に入ってから今のような形に成立した比較的新しい楽器です。琴はそれよりもはるかに昔からあった楽器です。今日はその、はるか昔からの琴の話をさせていただくこととなります。



各種の笛を鳴らす柘谷隆男さん



ホムスを演奏する荏原小百合さん



復元琴を解説する荒山千恵さん

### 3 「倍音」をめぐる

(司会) さて、これから3人で自由にお話ししていただきますが、キーワードの1つとして「倍音」ということがあるのではないかな、と。さきほど枡谷先生、荏原さんがお話しになった中で「倍音」という専門用語はお使いにならなかったですが、枡谷先生が鹿笛の説明の中で、指孔を開閉しなくても音階を吹き分けられることをご紹介なさっていました。

「倍音」という現象を、会場の皆さんはご存じでしょうか。...これは、鼎談の皆さんから話していただいたほうがいいですよ。

(枡谷) はい。...危険ですね、私がマイクを持つと長くなるから(笑)。「倍」というのは「2倍」という意味が代表的ですが、倍音の場合、何が倍かという周波数なんですね。

今日は、周波数が倍の楽器を持って来ました。私の年代くらいまでだと小学校でこれ、ソプラノリコーダーを履修しました。これを、指孔を押さえないで吹いてみます(♪試奏)。これに対し、ここにある「クライネソプラニーノ」あるいは「オクターブソプラノリコーダー」ともいいますが、長さが先ほどのソプラノリコーダーの半分です【写真7】。振動する長さが半分になるとどうなるかという、(♪試奏)。ちょうど、いわゆる1オクターブ上になります。ラテン語から来ている「オクト」というのは「8」を意味します。「オクトパス」、タコ、8本足ですね。「ド、レ、ミ、ファ、ソ、ラ、シ、ド」、8つですね、8つ上。専門用語では「8度」と言いますがけれども、管の長さが半分になると、振動数が倍になるという、数学的な計算です。私は数学が得意じゃないんですけど。

今日はバイクなので荷物に入れられませんが、ちょうど尺八ぐらいの長さで「テナーリコーダー」というものもあります。ソプラノリコーダーの倍の長さです。そうするとまた1オクターブ違います。音も、楽器からすると、テナーリコーダーは楽器の長さが、この小さいほうのクライネソプラニーノの1, 2, 3, 4倍になります。4倍になると4オクターブ違うのではなくて、2オクターブです。数学の不得意な私が話すのもあれですが、2のn乗倍ということになります。1オクターブ下げたかったら、2の1乗ですから、2倍。2オクターブということは2の2乗ですから4倍。3オクターブということは、2の3乗で8倍。そういう数学的な計算になっています。

実は音楽というのは古代ギリシャ時代の学問、「スコラ」という、「スクール」の語源になった場所での、数学の一部でした。

...そういう物理的な現象のなかで、先ほど(=入場時)私はエルクの笛をピキピキと吹きましたけど、たとえば信号ラッパ。トランペットやったことのあるかたはわかると思いますけど、唇の緊張を上げていくと、(♪試演)と変わっていきますよね。それ、実は周波数の倍、倍、倍、という形になっているんです。そういう中から、私たちが知っているいわゆる「音階」が生まれて来たのではないかと思います。

...この話をするだけで2時間かかっちゃうんですけど(笑)、倍音という、数学的な集積



写真7

クライネ・ソプラニーノ・リコーダー(上)、  
ソプラノ・リコーダー(下)

長さが倍になると1オクターブ低くなる。

が音階になっているということをちょっと説明しました。以上です。

**(司会)** 口琴は「倍音楽器」とも言われますよね。

**(荏原)** はい、口琴は、見ていただくとわかるとおり、弁が1本です。ですから一般的な楽器として考えると、1つの音しか出せないように感じると思うんですけど、口琴の音を音響解析すると、基本周波数の基音には複数の倍音が含まれています。枅谷先生が話してくださったことと同じですが、たとえば、ピアノを弾きますよね、右の方のペダルを踏むとホワーンと響き渡るのを聴いたことがないですか。あれが倍音です。

口琴は、1本の弁が出す基音は1つなんですけれども、複数の倍音が含まれていて、舌の位置を変えたりすることによって、口の中に響く特定の倍音を目立たせるようにすることができます。すると、聴く側がその音程を聴きわけることが可能となります。これは北海道大学名誉教授の阿部和厚先生の研究によれば錯覚音 (missing fundamental) と呼ばれるものです。

こういうふうに、(♪試奏)、歯の裏に舌を当てて、その舌を喉元まで上下に少しずつ移動していくと (♪試奏)、音を上げたり下げたり、オクターブ上げたりすることができます。

**(司会)** その特定の倍音を目立たせる方法で、みなさんの知っているメロディを倍音で演奏することはできますか？ ...というのは、(基音ではなく倍音の方を聴くというのは) 耳が慣れないと聴き取れないと思うんですね。このビヨーンという音の、上の方で (♪) って (倍音が) 鳴っていて。その鳴っている方の音程をメロディにしていく口琴の文化もあります。アイヌのムックリは音程を作る方向に行かないで、音色そのものを変えていくタイプですが、作ろうと思ったらメロディも作れる、そういう楽器だと。

**(枅谷)** 皆さんの知っていそうなメロディを倍音で吹くのはなかなか難しいんですけども、(♪試奏)、ちょっと狂っていますが、(♪試奏)、息の圧力を変えていくと、倍音が鳴ります。基本の音はこれです (♪試奏)、今1オクターブ上がりました。周波数が倍です。さっきお話ししましたよね。2倍になると1オクターブ、3倍になると、基音の「ド」が (1オクターブと5度上の) 「ソ」になる。(♪試奏) 今「ソ」が出ています。4倍になるとその上の「ド」、5倍になるとその上の「ミ」です (♪試奏)。

もっとやると、「ソ」「シb」、その上もこれ (=手持ちの笛) で出せたらいいんですけど、楽器の性能上無理です。その上に行けば、「ド」「レ」「ミ」「ファ#」。ある程度皆さんのご存じの音楽を、これだけで弾くことができます。

...トランペットをご覧になったことがある方はわかると思うんですが、穴が3つあると、(音階音を) 全部吹けます (♪試奏)。今ドレミファソラシドってやりました。ドレミファソラシドで音は8つあり、リコーダーは8つの指孔がありますが、倍音と、この穴の組み合わせでやっていくなら、そんなに必要ない。倍音を利用するなら指孔は3つ、2つでもいいんですよ。それで音階音が成立します。...説明になったかどうか分からないけど。

**(司会)** 重要なことは、どんな楽器でも、鳴らしたら必ずその音には倍音というものが含まれているってことですね、はっきり聞こえてくるとこないとに関わらず。

楽器を持つ文化であれば、どの民族も、多かれ少なかれ倍音というものを活かしたかたちで、それぞれの楽器文化を持っている。倍音という現象自体は物理的な現象だから、どこにでもある。ただ、それをどう生かして、どんなふうに楽器として発展させるかは、それぞれの民族の文化による、ということですね。

さて、琴は、今までお2人が例示した笛や口琴とはまた違って、弦を張りますね。倍音については、弦で説明した方が分かりやすいと思います。たとえば、弦を弾いて鳴らすとき、張ってある弦の真ん中のあたりを、指で完全に抑えるのではなくちょっとだけ指を触れておいて、1 オクターブ上の音を鳴らす、ハーモニクスという技法があります。弦楽器を持つ民族は、経験的にそういうことを知っていると思いますが、どうでしょう荒山さん。

**(荒山)** 実は考古学では、音を鳴らすところまでもっていくこと自体が、ものすごく難しい。今のところ日本の遺跡で出土した弥生・古墳時代の絃楽器で絃が残っているものは、まだ一例も見つかっていません。今、倍音のいろいろ話がありましたけど、(今の概念でいう)音階っていうものが弥生・古墳時代にあったのかどうか、というところからまず考えていかなければなりません。(絃で)倍音について具体的に語れるようになることは、憧れですね。

**(司会)** 弦を張っていれば必ず、倍音をハーモニクスで出すことは、あったと私は思うんです。その倍音をどう活かすか、音階を作ったかどうか、は別としてですね。

#### 4 音の考古学

**(柘谷)** 関連して、いいですか？ 今日、1つだけ打楽器を持って来ました。これ、「サヌカイト」といって、石器の材料になるものです。サヌカイトの「サヌ」は讃岐のサヌ。香川県のある山でしか採れない、特別な石です。地元の人たちは「カンカン石」と言っています。これ、叩くといい音がします(♪試奏)。

サヌカイトを研究していらっしゃる方によれば、ベトナムのダックラックっていう2万年前の遺跡に、「リソホーン」という、この石が四角く切られたものがいくつかきれいに並んでいるのが見つかっています。これ、叩いてみたら音階になる。だから2万年前に音階認識があった可能性があります。実際にそれが「楽器」であったかというのは、考古学の立場で大変難しいところなんでしょうけど、1つの傍証として考えられますね。

**(荏原)** 柘谷先生がおっしゃったことに関連して、荒山さんに聞きたいんですが、楽器として使われていたのか、動物が何かをしたのか分からないけれど、筒状のものに穴がいくつも開いていたりするので、笛ではないかと推測されているような考古資料があると思います。それはまた琴と違った状況があるんでしょうか。

**(荒山)** はい。先ほど、本の表紙をご覧いただきましたが、吹く楽器、叩く楽器、弦を弾いて鳴らす楽器、この3つに分けて考古資料をみたのですが、この中でとくに機能の推定が難しいのが、吹いて鳴らす楽器だと思います。先ほど卵形の土製品をご紹介しましたが、あれは山陰を中心とした日本海沿岸域の遺跡に約100点出土していて、中国の陶埴(とうけん)という土笛に似た形をしているので、笛ではないかと言われています。けれども、この出土品を実際に吹いて鳴らそうとすると、吹き口に該当する部分が直径3cmくらい大きく開いていて、ふつうに吹こうとするとなかなか鳴らない。中国の陶埴の場合は、吹き口が小さく鳴るようにできている。外観が似ていて楽器かどうかとなったときに、例えば先ほどの琴の場合のように、弾琴埴輪ですとか、時代が少し新しくなりますけど正倉院宝物に和琴があるなど、比較資料があると具体的な分析ができるのですけれども、いま紹介している土製品の場合のように、笛を見極めるのは難しいことが多いのです。

**(荏原)** たとえば、今その資料からは消えてなくなっているけれど、オーボエとかクラリ

ネットみたいな、リードみたいなものが付いていて、それが消えてしまった可能性も検討されたりするんですか？

**(荒山)** はい、そうですね。補助具があるとまた、鳴るという可能性も出てきます。そういう、想定される仮説や条件を組み合わせ、いろいろと検討を積み重ねていかないと、なかなか難しい。笛の場合は、奈良・平安時代頃に竹製の笛が複数の遺跡からみつかっており、なかなか有機質なので残りにくくはあるのですが、その頃には横笛があったことは言えると思います。

**(柘谷)** 考古学はものすごく、私から見ると慎重な学問ですから、科学的にきちっと検証されなければいけません...

先ほど私が出囃子のときに鹿笛を吹いた後に、これも吹きました(♪試奏)。これ、「鳥笛」なんです。鳥をおびき寄せて、霞網(かすみあみ)とかトリモチで、生け捕りにするんですよ。たとえばオウムのような美しい鳥は、殺したら売り物になりませんから、これでおびき寄せます。

あるいは、先っぽに、丸いものを付けてそこに笛を付けて、頭に当てて脳震盪を起こさせて獲る方法もあります。今、お見せしますが、これ実は、ある考古学の権威のかたにお見せしたら、...ちょっとわかりにくいかもしれませんが、真ん中に穴が開いています。立ててみると、なんかえぐれてますよね。わかります？

これ、考古学者はかならず紡錘車(ぼうすいしゃ)といいます。これ、吹いてもちっともならない(♪試奏)。今私、吸っているんです(♪試奏)。吹いて、「音が鳴るから楽器だよ」ということは大変難しいですけど、可能性があるということをもとつ頭に入れながら、私も音楽考古研究会の会員で、荒山さんなど非常に慎重なかと、私のような安易なのと(笑)うまくせめぎ合うと(笑)なんか突破口があるのかなって。

**(荒山)** 先ほど「音の考古学」って言いましたけれども、実は、考古学で音の文化を扱おうとしたときは、考古学者だけでは明らかにできないと思うのですよね。いろいろな関連する分野の人たちと検討することで、明らかになる。だから音楽学の方たち、あるいは楽器を演奏される方ですとか、作られる方ですとか、関連する方たちと議論することで、明らかになっていくことと思います。

**(司会)** 先ほど、荒山さんが見せてくださった本の表紙の真ん中、銅鐸でしたっけ？

**(荒山)** 銅鐸よりも小さな、小銅鐸(小型青銅製ベル)というものになります。銅鐸については、最初はベルとして(大陸から)伝わってきたと考えられているものです。中には「舌(ぜつ)」と呼ばれる棒を吊り下げて、上には吊り下げる部分(鈕)があって、ゆり動かされることによって、中で舌がぶつかって音が鳴るというしくみのものです。なんですけれども、日本では、銅鐸と呼ばれているものは、どんどん大きくなって行って、すごく装飾も多くなっていくのです<sup>2</sup>。『聞く銅鐸』から『見る銅鐸』へ」と言われ、祭器として発達したと考えられています。

今回、私が図で紹介したのは、小銅鐸(小型青銅製ベル)です。銅鐸が一番大きなものだと135cmぐらいあるのに対して、小銅鐸は10cm前後、最も小さなものは5cmにも満たない<sup>3</sup>。こんな小さなベルが、銅鐸と同じ時代にあるのです。小銅鐸はどうやら鳴らして使っていたとみられます。